

生活者の視点から、市場経済の基礎や金融のしくみを分かりやすく解説します

川元 由喜子 Kawamoto Yukiko **経済に強いママを増やす会主宰**
1985年日興証券(株)入社、1987~1992年ニューヨーク勤務。1995~2003年HSBC投信投資顧問(株)。2009~2016年ありがとう投信(株)。2010年より「経済に強いママを増やす会」主宰。草の根金融教育活動に注力。

「リスクをとる」ということ



私たちが生活している市場経済には「リスク」が付きものです。経済を支える企業活動は常にリスクを負って行われていますし、金融市場ではリスクに応じて金融商品の価格が動きます。「リスクをとる」という表現は日常的に使いますが、一般的にはそれは危険を冒す、という響きを持ちます。ですから「リスク」というのは「危険」と同じであろう、したがってそれは避けて通らなければならない、という発想になります。

しかし市場経済で言うところの「リスク」は、避けて通ることはできないのです。実は経済活動に限らず、私たちの日常は「リスクをとる」機会に溢れているのです。それはどういうことでしょうか？

3カ月ほど前にちょうど良い例がありました。多分どなたもご覧になったことでしょう、冬季オリンピック・パラリンピック。トップのメダルを争う選手たちは、スピードを競うにしても点数を競うにしても、ギリギリの闘いを繰り広げるなかで、「リスクをとる」べきか決断を迫られる場面に必ず遭遇するはず。自分が金メダル候補になったと想像してください。難度の高い技を避けてミスのない演技をすれば、銅メダルは確実です。しかしどうしても金メダルが欲しい、そう思ったら、あえて「リスクをとって」難しい技に挑むでしょう(図1)。

リスクをとった結果起こり得ること、それはうまくいけば金メダルが取れる代わりに、失敗すればメダルは手に入らないということです。

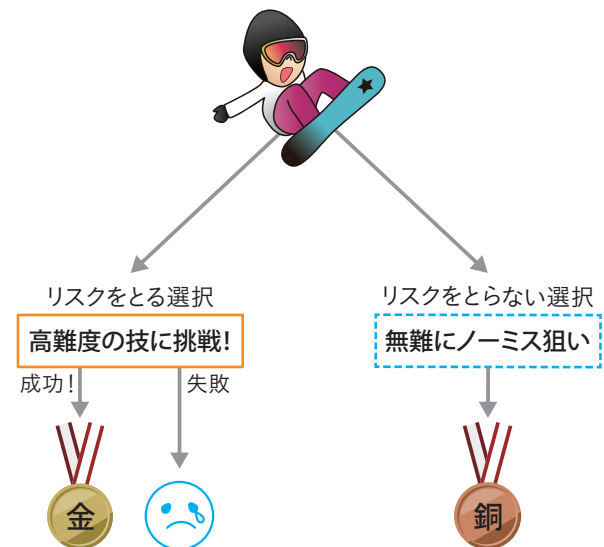
リスクをとらずに安全策を取れば、金には手が届かないけれど、メダリストにはなれます。これは言い換えれば、リスクをとることによって、得られる結果の幅が広がる、ということです。これがまさに「リスクをとる」ということなのです。そうであれば、「リスク」というのは必ずしも避けるべきものではない、ということが分かるでしょう。

身近にあるさまざまなリスク



私たちの生活にもっと身近なところにも、リスクをとる場面はあります。買い物をしていて、似たような商品からどれかを選ぶというのはよくある状況です。例えば衣料品売り場でシャツを選ぶとしましょう。普段使っているメーカーのものであれば、品質も使い心地も分かってい

図1 リスクをとるか、とらないかの選択場面



ます。ところがあなたは、隣のお店に同じようなシャツが半額で売られているのを見つけます。さて、もしこの半額の商品を選んだ場合、何が起こり得るでしょうか。

半額であるにもかかわらず通常の商品と同じ品質であれば、価格が安かった分丸々得をすることになります。しかし、下手をすれば、着心地が悪かったり型が崩れたりして、すぐに新しいものに買い換える羽目になるかもしれません（こういうのを、安物買いの銭失い、といいますね）。買ったことのないものを買うと、その結果非常に得をしたり、逆に損をしたりする、つまり結果の幅が広がります。これは、よく知らないものを買う、というリスクを冒しているのです。

目新しい家電製品を買う、という例はどうでしょうか。最新の機能が付いた製品は、従来のものより5割高い価格が付いています。高いけれど、なんだかとても便利そうなので、あなたはこの新機能付きの製品を買うことにしました。本当に新しい機能が便利で大満足ならばいいのですが、使ってみたら大して便利ではないと思うかもしれないし、新しい機能が付いた分壊れやすいかもしれません。よく知らない機能にお金を払うというリスクをとった結果、大きな満足を得るか、無用の長物を手にするか、やはり結果に幅が出ていることが分かります。

企業活動の負うリスクについても見てみましょう。ここ数年自社で製造している製品の市場が、拡大傾向にあるとします。ところが工場は手いっぱい、もう増産はできません。そこで経営者は、製造設備を増やすべきかどうか、判断を迫られることになるでしょう。今後も市場の拡大が続くであろうと予想し、資金を借り入れて設備投資に踏み切ります。その結果起こり得ることは、うまくいけばもくろみどおり受注は増え、事業はますます拡大するでしょう。しかし予想に反して市場の拡大が続かず、せつ

かく増やした設備が遊んでしまえば、投じた分が無駄になるばかりか、負債の返済に困る可能性もあります。設備投資をする、というリスクをとった結果がどうなるか、事前に確実に分かるということは無いのです。それがリスクをとるということです。

リスクとリターン



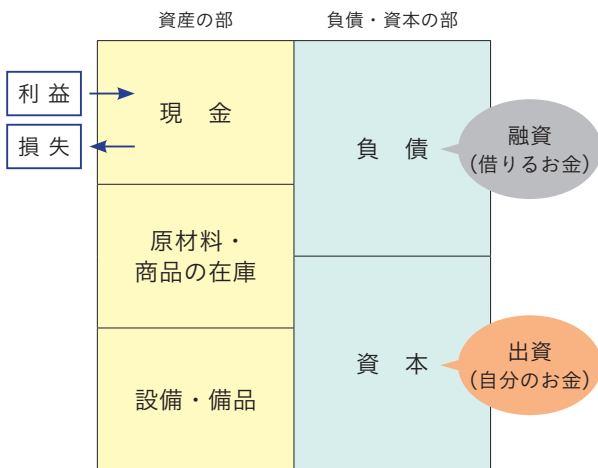
ここまでの例でお分かりのように、リスクをとる時はとるべき理由があります。現状を打破しよう、積極的に良い結果を求めよう、そのためには失敗する可能性のある程度受け入れなくてはならない、それがリスクをとることなのです。現状を維持していれば、結果はかなり確実に見通せます。しかし飛躍は期待できません。

大きな利を得るために、リスクをとる。市場経済ではこれを「リスクとリターンの関係」というように表します。「リターン」というのは「利益」「利得」という意味です。リスクをとらなければ、リターンは得られない、というわけです。

金融市場について学ぶとき、「リスク」については「価格の振れ幅の大きいものはリスクが大きい」と教わります。ここまでの説明で、リスクをとると結果の幅が大きくなる、という表現を使いましたが、それを金融商品に当てはめると、価格の上下動が激しい、ということになるわけです。振れ幅が大きければ、短期間で急激に利益が上がることもあるでしょうし、逆に短期間で大きく損失が出ることもあります。リターンを得るためにリスクをとっているわけです。ですからそれは100%正しいのですが、よく考えてみると、「振れ幅の大きいものはリスクが大きい」のではなく、「リスクをとっているから振れ幅が大きくなるのだ」ということに気がつきます。

ここで、前回「金融の基礎」で使った「株式」のバランスシートを再びご覧いただきましょう

図2 企業のバランスシート



(図2)。右側(負債・資本の部)の上段が「借りのお金」、下段は「自分のお金」です。その両方で株式会社は成り立つ、という話でした。この2つは性格の違うお金です。借りたお金は、会社の事業がうまくいこうがいくまいが、利息を付けて返さねばなりません。これはお金を貸す側からすると、とても確実性の高い、したがって「リスクの低い」お金です。しかし「自分のお金」であれば、事業がうまくいかないときにはその分減ってしまいます。会社が潰れれば、すっかりなくなってしまいうこともあります。その代わりに、事業が成功して利益が上がれば、それはすべて「自分のお金」の出し手である株主に配分されるのです。

株価はこの「結果の振れ幅」を反映して動きます。業績がよくて大きく成長しそうだと思えば、成長した分は自分のものになるのですから、株主になりたいと思う人は増えるでしょう。もし会社が潰れそうなほど状況が悪いと判断されれば、大変とばかりに、多くの株主は売ろうとするでしょう。その結果、株式の価格は大きく変動するのです。決まった時期に決まった利息を受け取り、満期に受け取る額も決まっているものであれば、価格が大きく変動することはありません。このように株式は、動きが激しいからリスクが高いのではなく、多くのリスクをとっ

ているから値動きが激しくなるのです。

不確実性とリスク



もう一つ「リスク」を表すものとして、「不確実性」という表現があります。「どうなるか分からないこと」が「リスク」なのです。ここまでで、リスクをとることによって結果が不確実になるという例をいくつか見てきました。「リスクがある」とは「どうなるか分からないこと」なのです。「リスクがある」というと「損をする」という勘違いをされがちですが、「損をする」と確実に分かっているならば、そんなものを買う人はいません。「得をする」と思うからこそ、結果的に損をすることもある。事前に結果は分からないのです。

考えてみれば、世の中は不確実なことだらけです。確実に未来を予想することは不可能なのですから、私たちは知らず知らずのうちに、さまざまなリスクをとりながら生活しているのです。それは、誰もが自由な選択肢を持っていることと裏腹です。失敗を受け入れても高い目標に挑むのか、低くてもいいから確実な結果を望むのか、それはまさに個々人の選択なのです。

